

境界をめぐる物語

——平林たい子「夜風」論

倉 田 容 子

【キーワード】 農民文学／小作農と工場労働者／階級問題と女性解放問題／境界

1. 公的な活動様式

小堀甚二の自伝的小説『妖怪を見た』（角川書店、一九五九・七）には、闘病中の妻・鶴代が坂井圭三に対し、季節外れの梨を食べたいと言いつ出す場面がある。鶴代は、労農派の一斉検拳の際、圭三の關係で拘引され、不法監禁されたが、結核性腹膜炎と肋膜炎を併発したため釈放された。梨のエピソードは、予審が済み保釈された圭三が、再度入院した鶴代の看病にあたって最中の出来事である。「信州に問い合わせれば、困い梨があるかも知れないわ」（152頁）と言う鶴代に対し、圭三が「よし、問い合わせるはやるが、お前は季節はずれの食べ物など要求するとき、

あらゆる意味でたまにはおれが困りはしないかと思うときはないかね」（同前）と言うと、鶴代はこう答える。

「私は治る権利があるから、欲しいと思うものはなんでも要求するわ。あなたが経済関係や何かで私の要求を容れるかどうかは、それはあなたの自由だけれど」（152頁）

これを聞いた圭三の内面は、次のように語られる。「坂井は自分自身に対しては貪慾な要求を持っていたが、他人に対する要求にはそれが当然のことであつても至つて怯懦な男である。（略）権利の要求となると、要求される側の不快の方が先に心に浮かんで、つい臆病になつてしまふのである。彼はそれを自分の怒隷性の現われとして、決して自分に許してはいなかつた。それだけに、自分と対蹠的な鶴代の明快な権利主張に、むしろ称讚の気持ちさえ浮ぶのだった」（152頁）。

鶴代のモデルは平林たい子であることが知られているが、この会話が実際に二人の間で交わされたものであるかどうかは定かではない。¹しかし、右に引用した言葉には、いかにもたい子らしいと思わせる要素がある。拙著「理知」と「意志」のフェミニズム——平林たい子の初期テキストにおける公／私の脱領域化」（『日本文学』二〇二〇・一一）で述べたように、たい子のテキストは、その主題が階級に関わるものであれ婦人問題に関わるものであれ、公的な活動様式に貫かれている。公的な活動様式とは、田村哲樹がペーター・J・シュタインベルガーの議論を紹介する形で示した概念である。シュタインベルガーは、公／私区分を領域や空間として捉える見方では現実の複雑さを理解し得ないとし、公／私区分を活動様式（‘manners of acting’）の問題として捉えることを提案した。²ここではさらに、公

的な活動様式について次のように述べられていることに注意したい。

To act in a public manner is, thus, to be a generalizer. It is to focus on generic similarities and differences, to ignore, or at least to de-emphasize, that which is eccentric, peculiar, and special. It is to be, roughly, a scientist or a lawyer.

To act in a private manner is something very different. No parent, qua parent, is a scientist or a lawyer. In the family, the particular is treated not as an instance of a universal idea but, rather, as a thing unto itself, something that actually defies generalization. We are, indeed, offended by the proposition that our loved ones might be mere embodiments of generalized types. Each of us is unique and demands to be treated as such. If we take this seriously, moreover, then we must agree that a private manner of acting cannot be rule-governed, procedural, objective, or legalistic. (p.305-306)

公的な活動様式とは、規則的、手続きの、客観的、法律的なものであり、それは関係性を「一般化」(‘generalizer’) するものにのみある。そうした振る舞いは、愛情や親密性に基いて行動・発言し(‘act (say) ‘affectionately’ or ‘intimately’ or ‘in confidence’; p.307) ‘親密な者」を「一般化」不可能なかげがえのない存在として扱う場面、たとえば家庭内での親子間のやりとりなどにはなじまないし、シユタインベルガーは言う。

ただし、シユタインベルガーは「We generally think of sexual intimacy, for example, as a private mat-

ter: we demur, however, when it involves incest minors, or the absence of consent (and we are much less inclined to agree about, say, sodomy or sadomasochism)。(p.310)と述べており、その公的な活動様式概念にはホモフォビアが内包されていたことが明らかになる。この記述が図らずも示しているように、公的な活動様式とは必ずしも正義や公正さを問い直し続けるような批評的概念ではなく、むしろ慣習的・伝統的な規範に拘束される側面を持つ。公的／私的な活動様式の具体的内実や、その本質は何なのかといった問題については議論の余地があると思われるが、ここではひとまず、田村が重要視する公私の脱領域化と、関係性の「一般化」という点に着目したい。

『妖怪を見た』の梨のエピソードがいかにもたい子らしいものに見えるのは、それが、夫との関係性を「一般化するものであるからだ。「おれが困りはしないかと思うときはないかね」と聞くと、圭三は鶴代に対して、愛情や親密さに基づく特別な配慮、すなわち私的な活動様式を期待している。一方、鶴代は自らの「権利」に基づいて「要求」を行い、自分も愛情や親密さに基づく配慮を行わない代わりに、圭三にもそれを要求せず、「あなたが経済関係や何かで私の要求を容れるかどうかは、それはあなたの自由だけだ」と言う。夫婦の間でも個々人の「権利」と「自由」に基づく交渉を行うことを当然と考える鶴代と、愛情や親密さに基づく特別な配慮を求める坂井とは、同じ空間・領域を共有していながらも、その行動様式が異なっているのである。

たい子は、たとえば「同性作家への警告その他」(「解放」一九二六・六)において、現在の「婦人作家」は「恋愛、道徳、家族制度の男性中心主義に対する呪詛の声」(306頁)を綴るようになったが、そこには「いかにして、我等が、かくも男性の奴隷に落ちたか、男性中心の道徳は、いかにしてかくも発達したか、更に我等が、この呪うべき社会のあらゆる制度の鉄鎖をたちきるためには、何が必要であるか」(同前)を追求するような「明確な理知と、積極的な

戦闘意志」(同前)が欠けていると批判した。こうしたたい子の、社会に対してであれ私的関係に対してであれ「あらゆる制度の鉄鎖」を剔抉する姿勢と、家庭内においても客観性と交渉の手続きを保持する先ほどの鶴代のエピソードは、通底しているように見える。

旧稿では、たい子の言論に対する姿勢が示されたテキストとして「治療室にて」(「文芸戦線」一九二七・八)を取り上げ、「私」の私的感情が公的な活動様式(「判断」と「説明責任」)へと昇華されていることを論じた。「治療室にて」は身边に材を取った所謂「体験小説」であるが、それでは、「体験」を離れた「客観小説」においては、空間・領域や行動様式をめぐってどのような認識が示されているのか。本稿では、農村ものである「夜風」(「文芸戦線」一九二八・三)を取り上げ、そこに内包された同時代的文脈を確認した上で、空間・領域の境界をめぐる物語を浮びがらせたい。結論を先取りして言えば、「夜風」は境界線が引かれるその瞬間に焦点を当てることで、自明のものと思われている領域の区分を脱自然化し、権力の所在を再考する視座を提示するものと思われる。

2. 「身边的認識」からの離陸

「夜風」は、二つの物語を軸としている。一つは、八ヶ岳の麓の養蠶村の小作農である末吉が、隣家の陽之助と結託し、地主であり金製糸工場の工場主でもある善兵衛に抵抗の姿勢を示す物語、いま一つは、夫に死に別れて実家に戻っている末吉の姉のお仙が「田植の日傭ひ稼ぎで知合つた日傭といの男」(123頁)の子を妊娠し、兄の清次郎に責め立てられながら土間で出産、その子を殺すまでの物語である。

テクストの分析に入る前に、これらの物語のうち、どの部分が同時代的な文脈に規定されたものであるのかを確認しておきたい。岡野幸江が「たい子の階級的な意識を生んだ原点は、故郷信州の農村にあった」(63頁)と指摘するように、農村という題材はたい子のバックグラウンドに導かれた側面もあったと思われるが、同時に一九二〇年代のプロレタリア文学運動に固有の文脈も内包している。ここでは、「身辺的認識」からの離陸と、雑誌「農民」派との対立という、二つの同時代的な文脈を確認していく。

まず、前者について見ていく。たい子は「処女作の頃——文芸戦線と解放に発表」(「婦人文芸」一九三四・三)において、「治療室にて」を書き上げた頃の苦悩を次のように記している。

福本イズムと反福本イズム——そういうどちらも多くも多かれ少かれ、例の福本イズムの潮気を帯びてはいたが、やはり、あの時の、対立の性質は、太ざっぱに見て、この二つのものの摩擦と言えらるであろう。どちらの理論にも、目をパチパチさせているだけの私は、ただ、自分の心の爆発に忠実であるだけで、無我夢中で「治療室にて」をかいた。そして、それっきり、一年近く何も書かなかった。私は、「治療室にて」を書き上げると一緒に、汲めば尽きてしまう所謂体験小説の、プロレタリア小説としての限界性に気づきまた、同時に、まず自分の身辺的認識から起った階級意識の性質から言って、どうしても自分は体験小説の域を超え得ないものであることにも気づき、大きな苦悶に打つかつていたのである。それは、私一人の苦しみではなかった。身辺的認識をいかに拡大して社会的歩調に追いつかせるかは、労働者作家が一般に疲れてしまったその頃の一つの課題となっていたのである。(380—381頁)

よく知られているように、「身辺的認識をいかに拡大して社会的歩調に追いつかせるか」という課題は青野季吉「自然生長と目的意識」〔文芸戦線〕一九二六・九)によってもたらされた。「自然生長と目的意識」において季吉は、「プロレタリア階級は自然に生長する。それが自然に生長すると共に、表現欲も自然に生長する。その具体的の頭れがプロレタリア文学である」(4頁)と述べた上で、しかしそれはまだ「運動」の段階には達しておらず、「プロレタリア階級の闘争目的を自覚して始めて、それは階級のための芸術となる。即ち社会主義思想によつて導かれて始めて、それは階級のための芸術となるのである。そしてこゝに始めて、プロレタリア文学運動が起るのであり起つたのである」(同前)として「目的意識」の重要性を説いた。たい子は「実感的作家論」〔群像〕一九五九・一〇(8)の「青野季吉論」において、「この論文は、今考えてみると、ちよつとあとに現れた大学マルキシストたるプロ芸派の主張に非常に近い」(218頁)と述べ、労働者作家を多く擁する「文芸戦線」派(文戦派)にとつてはこの提言が打撃となつたと振り返っている。

「プロ芸派」すなわち日本プロレタリア芸術連盟の主流派は、福本イズムの影響を受けた鹿地亘や中野重治らであり、一九二七年(昭和二)のプロ芸の分裂に際して、たい子は、蔵原惟人、青野季吉、葉山嘉樹、黒島伝治らとともに連盟を脱退、労農芸術家連盟(労芸)を創立し、連盟員となる⁹⁾。プロ芸と労芸は袂を分かつたが、たい子が「プロ芸派の主張に非常に近い」と述べた「自然生長と目的意識」の主張は労芸にもそのまま引き継がれた。同年七月号の「文芸戦線」に掲載された労芸の「綱領(草案)」(青野季吉・田口憲一執筆)の冒頭には、「プロレタリア芸術運動は、自然発生的な運動ではなくして、目的意識的な運動である。その発生の形式より云へば、自然発生的な反ブルジョア

的芸術行動を、無産階級の究極目的の見地よりこれを把握し、一定の方向に目的付け、組織付けんとし、且目的付けて、来た運動である。従つてプロレタリア芸術運動より、目的意識性を控除したならば全然意味がないと云つていいであらう」（10頁）とある。

ただし、「身辺的認識」を「社会的歩調に追いつかせる」という課題は、「福本イズムの潮氣」というだけでなく、たい子自身の思想とも響き合う部分があったと思われる。たい子は「治療室にて」を「汲めば尽きてしまう所謂体験小説」と自ら評したが、ここでは夫や子に対する私的感情と主義の相克が語られ、その語りは「私」が置かれている状況と彼女の判断の根拠を説明し尽くすもの——公的な活動様式——となっている。題材は「体験」に取材したものであったにせよ、ただ呪詛を書き連ねるのではなく、「この呪うべき社会のあらゆる制度の鉄鎖をたちきるためには、何が必要であるか」（同性作家への警告その他）306頁）を「明確な理知と、積極的な戦闘意志」（同前）によって追求すべきだというたい子の主張は、「治療室にて」においても実践されていたと言える。

いずれにせよ、より明確な「体験」からの離陸のため、たい子は題材を変更することを試みる。「処女作の頃」において、「いわば「治療室」を「正」とすると、「夜風」は「反」であり、「殴る」は「合」のようなもので、体験でも、非体験でもない第三のもののもりであった」（382頁）と述べているように、「夜風」は「非体験」小説である。小作農の地主への抵抗という題材は、「自然生長」した「プロレタリア文学」からの転換という同時代的な課題への応答として選ばれたものであったと、まずは言えるだろう。¹⁰一方、「夜風」のなかでもお仙の妊娠・出産に伴う身体的苦痛の語りは「治療室にて」などの「体験小説」と共通するものであり、単に女性の身体性の問題であるからというだけでなく、「体験」との距離の近さという点でも同時代的な問題意識から逸脱する要素であったと言える。

3. 「農民」派との対立

いま一つ念頭に置くべき同時代的文脈に、これも「自然生長」からの転換という要素と不可分ののだが、農民文学をめぐる論争が挙げられる。この時期、農民文学のあり方やその位置づけをめぐってプロレタリア文学陣営と対立していた一派に、雑誌「農民」(一九二七・一〇～一九三三・九)に参集した書き手たちがいた。一般に、「農民」派とプロレタリア文学運動の対立としては、全日本無産者芸術連盟(ナップ)との間に起きた論争が知られているが、文戦派もまた「農民」派と対立関係にあった。前掲「自然生長と目的意識」において、季吉は次のように述べている。

もし運動の意義が没却されて、自然生長への随喜へ逆転するやうなことがあれば、我々はどうしてもそれと闘争しなければならぬ。／私はこの頃よく発表される土の芸術の議論を読むとき、その悉くと言つてもよいからだが、自然生長の前に首を垂れてゐるやうな気味のあるのを、認めないではおれない。そこにはまだ運動はないと言つてよい。本統の目的意識のための運動がこれから起らねばならぬと思ふ。それが起らぬ以上、理論の混乱と、個人的満足があるばかりである。(5頁)

「この頃よく発表される土の芸術の議論」とは、「農民」派の代表的な書き手である犬田卯らの一連の農民文学論のことである。卯は、自らも創作を行うと同時に、農民自身の手になる「土の芸術」の理念を提唱した。加藤武雄との共著『農民文芸の研究』(春陽堂、一九二六・九)⁽¹²⁾において、卯は、「必要なことはたゞ一つである。即ち表現される

事——百姓が表現を持つこと——この一事である。／これまで百姓は表現を持たなかつた。言葉をかへて云へば、土の文芸と云ふものが、厳密な意味に於てなかつたのである(40―41頁)と述べた上で、その表現の特質について、「飽くまでも自分の表現、自分達の独特の表現を、文体ぶんたいを持たなくてはいけない。／それは力である。土から生れた、何物によつても動かされない、厳とした力の表現である。さうした底力を直截に現はすところから新しい文体が生れて来る」(41頁)と述べている。この主張からもうかがえるように、「土の文芸」とは農民の当事者性に根ざした概念であつた。一方、自然発生的な「プロレタリア文学」を「運動」とは認めない季吉の視座から見れば、その当事者性への信念こそが「自然生長」への回帰に他ならないということになる。¹³⁾

また、当事者性の是非だけでなく、都市と農村の関係をどのように捉えるかという点においても、文戦派と「農民」派は対立する見方を有していた。船戸修¹⁴⁾は、多くのプロレタリア文学者が「農村社会において地主に搾取される小作人を資本家に搾取される都市労働者と同様の存在と見なし、農民階級を小説の題材対象にしようとしていた」(35頁)のに対し、卯は、「一般勤労農民」は、地主だけでなく、資本家や労働者が所属する「都市」からも搾取、つまり「二重搾取」されている存在(同前)であり、プロレタリア文学もまた「農民を同盟者であると見なしながらも、その一方でプロレタリアによる農民蔑視＝農民支配を考えている」(同前)と捉えていたと指摘している。

このような卯の思想の背景には「農民自治主義」の思想的文脈がある。蔭木達也¹⁵⁾によれば、「農民自治」とは一九二五年(大正一五)に下中弥三郎によつて打ち出された概念であり、雑誌「農民自治」を通じて共有された。「農民自治」の概念は「農民」と「都会」、「自治」と「政治」という二つの対立項(15頁)によつて規定されているといふ。前者は、「小作人」に対する「地主」と「都会」の二重支配からの解放を目指すものであり、後者は「私有」「国

有」に対する「公有」化、「私営」「国营」に対する「公営」化（同前）を目指すものである。その背景には、普選を「知識と資本を権力として、農民をはじめとする民衆の権利を奪い、支配するための非民主的な制度」（14頁）とする見方があった。このような「農民自治」の観念を發展させたのが鐘田研一であり、さらにそれを引き継いで「農民」と「都会」の対立を労働のあり方——都市労働は「商工業」「産業主義」に付随する「器械的労働」である——へと敷衍したのが卯であったと、蔭木は言う。

「文芸戦線」には、このような「土の文芸」や「農民自治主義」に対する批判がしばしば掲載された。たとえば林房雄は「前号創作一人一評（一）」（「文芸戦線」一九二六・一二）において、黒島伝治「豚群」（「文芸戦線」一九二六・一一）を称賛しつつ、これと対置する形で「土の文芸」を批判している。「豚群」は、「小作料の代りに、今、相場が高くつて、百姓の生活を支へる唯一の手だてになつてゐる豚を差押へやう」（8頁）とする地主に対し、農民たちが豚を一齐に野に放つて持ち主を分からなくするという形で抵抗し、成功するという、「目的意識」を前景化した小説である。些か楽天的にも見える筋書きだが、房雄はこれを「真の意味の農民文学の好型」（13頁）を示したものと称賛し、次のように述べる。

農村を都会と対立させて、それに腰の抜けた智識階級の逃避場を見出さうとする甘つたるい「農村文学」農村をして国粹主義と混乱したアナーキズムの淵藪たらしめようとする封建的な「土の文芸」——そんな出鱈目な小ブルジョアの農民文学に対抗して、真に自己解放のために闘争しつつ、ある澁刺とした日本の農民を代表する作品の出現を、われわれは常に期待してゐた。心待ちに待つてゐた。／＼明るい、土と空氣の匂ひのする、それで

て真に闘争的な好短篇黒島君が、この方向へぐんぐん進んで行かれることを、私は喜びと期待とを持つて見てゐる。(13頁)

ここでは「土の文芸」が、「農村をして国粹主義と混乱したアナーキズムの淵藪たらしめようとする封建的な「土の文芸」、「出鱈目な小ブルジョア的な農民文学」と厳しく批判されている。「農村」と「都会」を対立的に捉える「農民自治主義」の思想については、たとえば小田隆「展望小感」(「文芸戦線」一九二六・一一)も、「いかに日本が農民の国であつたにせよ、三百二十万の農民のみ過信して、二百万の工場労働者と、一百万の交通労働者と三十万の鉱山労働者等を見向かぬことが果して全無産階級のために有利であらうか」(81頁)と疑問を呈している。また、「土の文芸」を「小ブルジョアの」とする批判は、一九二七年(昭和二)四月号から始まった投稿欄「タワリーシチ」(一九二七年五月号以降、表記は概ね「タワリッシ」となる)に掲載された佐々木義郎「農民作家よ」(一九二七・四)にも見られる。その論理は、「犬田氏にしても解放や文戦で度々書いてあるが唯一応は作品の持つ意図に肯定するけれど氏自身も一歩深く這入れば影があまりに薄い。もつと経済的にぐつと深く突き込んで、言葉でなく、理論でなく概念でなく、空想でない所のあるものに触れたら、あゝした推理の上に立つた教化的作品は生れて来ないわけだ。氏も又インテリゲンチヤの小ブルジョアのプロレタリア作家としてのみ存在が必要だ」(109頁)というものであり、経済的な洞察が不十分であることが「小ブルジョアの」と位置付けられている。

「夜風」において小作人と工場労働者が共に資本家に搾取される存在として描かれているのは、こうした「文芸戦線」における「土の文芸」や「農民自治主義」に対する批判という文脈において理解できる。一方、小作人と工場労働

働者の連帯の萌芽を示す一時的な勝利の後に置かれた、読者の「心持」をも「一層びしゃんこに」(343頁¹⁶)してしまおうお仙の子殺しは、農民文学論争の文脈から見ても「目的意識」から逸れたものであったことが分かる。

4. 「夜風」

以上のように見てくると、「夜風」のプロットのなかでも同時代性にとくに強く規定されている部分が明確になる。改めて確認するまでもないが、同時代的文脈が色濃いのは末吉の物語である。末吉の物語は、階級的意識に目覚めた小作人が団結し、地主に反旗を翻すという、「農民の全意識・心理をプロレタリア的に組織する文学」(137頁¹⁷)としての明快な「目的意識」に貫かれている。また、「工場でもうける一方、附近一体の土地を坪五号五勺で貸してゐる地主でもあつた」(127頁)という善兵衛、および、小作人を脱して金製糸工場の工男となった兄の清次郎や隣村の孝三の造形は、ともに資本家に搾取される存在としての小作農と工場労働者の連続性を示すものであり、ここには「農村」と「都会」の対立を否定し、農民と工場労働者の共闘を目指すというプロレタリア文学運動の理念が反映されている。その一方で、「体験小説」の要素を持つとともに、農民と工場労働者の共闘の萌芽を示唆する階級闘争の盛り上に冷や水を浴びせるお仙の物語は、こうした同時代の文脈からは逸脱したものであることが確認できた。

これまで「夜風」の読みは、他のたい子の初期小説同様、「再配分」の政治から「承認」の政治へと解釈の軸が移行してきており、前者の視座に立つ議論においては末吉の物語が、後者の視座に立つ議論においてはお仙の物語が評価されてきた。たとえば勝本清一郎は、「夜風」の自然描写は「あらゆる自然の相が時代の経済生活を反映して見え

るやうに描かれて」(341頁)おり、また人物造形にも「現代の社会生活の全体な機構に結びつけて取扱つて行かう」(342頁)とする意志が示されているとし、社会的認識と密着した描写の「圧迫感」(343頁)を称賛した。他方、中山和子¹⁹⁾は、プロレタリア文学批評の視座に立つ勝本の評価について「女のエクリチュールとしてのこの短篇の特質は、そこからすつかり抜け落ちてしまふ」(178頁)と指摘し、このようなプロレタリア文学批評が内包する男性・ロゴス中心主義に異議申し立てを行うのがお仙の「狂気と暴力」(185頁)であり、「藪の様に乱れた蓬髪の狂女は、正義と革命の理念をひき裂き、その理念のもつ権力構造を、身をもつて暴れていることになる」(185頁)と述べている。

これらの評価はいずれも、末吉の物語とお仙の物語の差異(「目的意識」からの距離や、ジェンダーの非対称性)に注目したものと言える。だが本稿では、両者の差異ではなく共通性に着目することで、「夜風」を境界をめぐる物語として読み直すことを試みたい。実のところ二つの物語は、領域的・空間的にそれほど明確に区別されているわけではない。末吉とお仙は、同じ村の中にある同じ家で寝起きし、経済を共にする家族である。また、二人はともに困窮する労働者であり、同時に資本家だけでなく兄の清次郎によって抑圧されている点でも共通している。以下に述べていくように、末吉とお仙はともに公私の領域を跨いで抑圧される者として造形されており、そのような共通性が描かれることによって、ここでは階級問題か女性解放問題かという分断を生み出す境界それ自体が問題化されていると思われる。

まず、お仙と末吉の共通性を確認していこう。お仙の子殺しはたしかに「プロレタリア階級の闘争目的」²⁰⁾への自覚に基づいて行われたものではないが、他方、岡野が「たとえ子供が産まれたとしても育てることのできない貧しさのなかで、こうすること以外にどんな選択肢があるのかと読者に問いかける」(66頁)と指摘しているとおり、それが

第一義的には経済的困窮の帰結として語られている点にも注意したい。

「せめて、この売上だけでも末吉にかして貰へたら、子供にさらしの襦袢一枚でもこしらへてやれるんだけども……だけど、先月の電気代も未だ払つてないで、そんな事あまあ言はないでおかず……」

今まで一つ四銭五厘から六銭位の値で町の仲買人に卸して毎月の電燈料と村税の戸数割にあて、来た卵は、副業の養鶏が近所の村々にはやり出してところ／＼に「地玉子あり」の札を見る様になつて三銭までに下落した。

その上に小学校の費用で戸数割は高くなり競争のない電燈会社の電燈料は十燭が八十銭といふ高値で、二ヶ月払ひおけると、すぐ自転車をやつて来て安全器のところの線を鋏で切つて行つてしまふ。(125-126頁)

お仙は、兄の清次郎に妊娠した横腹を蹴られても、「こんなことで、この出来事が許されるなら」(124頁)と思い、「だまつて、転つたま、兄を白い目で」(同前)見上げる。彼女が兄の暴力に耐えるのは、この家を出ても生計を立てる手だてがないからだ。お仙の「狂気と暴力」は、まさに彼女の「経済生活」によって引き起こされたのであり、必ずしも「正義と革命の理念」⁽²⁾と相反するものとは言えない。

他方、経済的困窮だけが彼ら姉弟の不幸の原因ではないことも明らかである。清次郎による末吉への搾取とお仙への暴力が、「兄の清次郎は怠けもので貧しい小作人の弟の末吉の米びつから、時々、石油缶を抜いて作った缶へ米をすくひ込んで、てれかくしに、妹のお仙を頭からどなりつけてかへつて行く」(124頁)と、一対のものとして語られていることに注意したい。清次郎は小作人をやめて「別に一戸持つて」(同前)おり、家は既に末吉が継いでいる

にもかかわらず、時々訪れては家父長の如く振る舞う。末吉とお仙は、地主や電燈会社から搾取されるだけでなく、家庭内においても兄の因習的な暴力の支配下にある。

このように経済に関わる問題と、「家」や家族に関わる問題は複雑に入り組んだ形で描かれており、末吉の物語とお仙の物語は必ずしも領域的に峻別されているわけではない。そして、このような両者の共通性に目を向けたとき、〈公〉／〈私〉区分のみならず、テクストには一貫して境界をめぐる闘争が描かれていることに気づかされる。

「夜風」において、農地と工場地、そして「家」の内と外を隔てる境界線は、力を持つ者によって恣意的に引き直されている。勝本が「あらゆる自然の相が時代の経済生活を反映して見えるやうに描かれている」と称賛した冒頭の自然描写も、「そこにも貧乏と金持とがきつかり区別されて存在した。金持の家には、何処からも目じるしになる真白な白壁の塀があつた。こんもりとよく手入れした松の木があつた」(122頁)と語られ、「貧乏」と「金持」の「区別」は「金持」の側が作った境界線——「真白な白壁の塀」や「こんもりとよく手入れした松の木」——によって可視化されていることが示されている。境界線を引く力を象徴するのが善兵衛である。先にも述べたように、善兵衛は地主であると同時に製糸工場の工場主でもあり、小作農と工場労働者とともに抑圧する者として造形されている。その権力の具体相は、土地利用の管理という形で端的に示されている。

「あいつ、田で年貢をとるのと工場でもうける利益とちや桁がちがふもので、いよいよ田を潰して工場をひろげずつていふ算段だな」(129頁)

善兵衛は、末吉や陽之助の小作地を取り上げ、そこを工場にしようとする。ここでは地主の権力が、農地と工場地の境界を、そこで生活する者たちの合意なしに変更することのできる力として描かれている。また、善兵衛は「あいつ等に稲を刈らせればあいつ等が持つてかへつてしまふ。こつちの大夫が刈ればこちらで持つてかへれるのだ」(138頁)と自ら泥田に入り、人夫らとともに末吉の稲を刈つて奪おうとする。この企ては、末吉と陽之助が刈り終わった稲を「いや、ありがと。ありがと。この稲は私の稲で私が持つて帰りますで」(140頁)と持つて帰ってしまうことで一応は頓挫するが、勝本が「地主と小作人との稲刈の争奪戦があれだけの簡単な押し遣りで終るものとは考へられない。地主の後ろには警察があり裁判所があり、しかもつと広い堅固なブルジョワジイの権力組織の全体系がある」(343頁)⁽²⁴⁾と指摘するとおり、「よし、これで来年の米は大変助かるぞ」(140頁)という末吉の見通しは楽天的に過ぎるように見える。

「堅固なブルジョワジイの権力組織の全体系」は、「夜風」においては政治へのアクセス権として示唆されている。善兵衛は、「ちやうど国会議員の選挙で、選挙権のある自作農が皆田を上つて行つたあと、村道にそつた八幡裏のひつそりした田で乾した稲を束ねてゐると選挙かへりの金製糸工場の善兵衛が俵にのつて砂利道を役場の方からやつて来た」(127頁)という形で物語世界に登場する。選挙権を持たない末吉は、お仙の噂をしていると思しき「選挙がへりの一団」(130頁)に行きあつても、彼らを通り過ぎるのを待つて「フン選挙が何だ」(同前)と眩くことしかできない。この一連の描写は、地主や自作農の富を支える農村の支配構造を、小作農が合法的な方法で変革することは困難であることを仄めかす。

お仙の出産をめぐつては、「家」の外と内の境界線が清次郎によつて引き直される。お仙は、「産婆に自転車に乗つ

て村中の道を通つて来られては困る身の上」(123-124頁)であるため村の公共空間から姿を隠しているが、清次郎は、「立て！ 立たぬか。布団は土間へ敷けえ。家の中で今度の産をすることあならぬ！ 断じてならぬ！ この野良猫女か！ 恥さらし！」(131頁)とお仙を打ち据える。清次郎は、「家」の内と外の境界線を恣意的に引き直し、お仙を内にふさわしくない存在として放逐する。清次郎の暴力の結果、お仙は公共の空間でもなく「家の中」でもない、「鶏の糞」(132頁)の落ちた「しめつた土間」(同前)で出産することになる。

善兵衛と清次郎の権力は、農地と工場地、「家」の内と外の境界線をコントロールし、富を篡奪したり暴力を振つたりする力として語られる。さきほど見た農民文学論争における「農村」と「都会」の支配関係をめぐる議論は、このような観点からすれば、両者を隔てる境界線こそが権力の所産であるということになる。「夜風」においては、「隣村の苦しい小作人の次男」(137頁)であり、「この春から、百姓の生活に見限りをつけてこの工場へ雇はれて来た」(同前)という孝三が、善兵衛に命じられて末吉の田の稲を刈り、「あの爺いの味方になつて、小作人の稲を刈つて取り上げるつちうわけだなあ」(同前)と思う場面がある。この場面は、小作農と工場労働者が分断させられる、まさにその瞬間を切り取ったものに他ならない。「都会」を「農民」の支配者と見なす「農民自治」派とも、教条主義的に両者の連帯を主張するプロレタリア文学陣営とも異なり、「夜風」は小作農と工場労働者の間にある境界線それ自体が孕む暴力性を具象化してみせたとと言える。

また、フェミニズム批評の視座から見て重要なのは、ここでは領域的・空間的な公／私の区別を超えて、いずれも境界をめぐって發揮される力の暴力性が描かれているということである。境界が生み出されるその瞬間を描くことは、領域の区別を自明のもの、固定的なものとして捉える見方を相対化することになる。ここでは階級闘争の主題と

「恋愛、道徳、家族制度の男性中心主義」（たい子「同性作家への警告その他」）をめぐる主題がともに権力論のなかに置き直され、家族関係も持つ者と持たざる者による境界をめぐる攻防戦として「一般化」（generalizer）された形で提示されている。そのことにより、二つの主題を隔てていた〈公〉／〈私〉区分それぞれ自体が問い直されているのである。

おわりに

以上のように、「夜風」は境界をめぐる権力と篡奪される個人のあり様を描き出すことにより、小作農と工場労働者の区別、また空間・領域的な〈公〉〈私〉の区別それぞれ自体を問題化するテキストであると言える。末吉の物語は同時代のプロレタリア文学運動の文脈に強く規定された側面を持つが、そのいわば模範的なプロレタリア文学としての末吉の物語と、そこから逸脱したお仙の物語とを、同時に問題化する脱領域的な視座を示し得た点に、たい子の独自性と今日的意義を見出すことができるだろう。

注

- (1) 『妖怪を見た』の序文において、甚二は二人の娘に向けて、「この小説にはお父さんの難行苦行の生涯の経験とそれと結び付いた発見、思想、詩がそのままにローマン風にもとめられている」（1頁）と記している。
- (2) 田村哲樹『政治理論とフェミニズムの間——国家・社会・家族』（昭和堂、二〇〇九・七）
- (3) Peter J. Steinberger, “Public and Private,” *Political Studies*, Vol.47, No.2

- (4) 引用は『平林たい子全集』第一〇巻(潮出版社、一九七九・五)による。
- (5) 岡野幸江『平林たい子——交錯する性・階級・民族』(善柿堂、二〇一六・六)
- (6) 阿部浪子『平林たい子——花に実を』武蔵野書房、一九八六・二)によれば、たい子の祖父の増右衛門は一九七二年(明治一五)まで名主をつとめ、一八七八年(明治一一)に機械製糸所を創業した人物であり、善兵衛の設定は増右衛門を想起させるものである。
- (7) 注(4)に同じ。
- (8) 注(4)に同じ。
- (9) たい子はまた、「非幹部派の日記」(二九二九・一)においても福本イズムへの批判を鮮明にした。
- (10) たい子の「非体験」小説としては他に、少女工おけいちゃんに起きた悲劇を描いた「蛹と一緒に」(『文芸市場』一九二七・五)や、同じおけいちゃんの物語がより広く労働者の群像劇のなかに置かれた「荷車」(『新潮』一九二八・六)、「夜風」と同じく農村に材を取った「耕地」(平林たい子『新鋭文学叢書 耕地』改造社、一九三〇・七)などが代表作として知られている。
- (11) 「農民」派とナップの農民文学論争については、卯自身が小田切秀雄編・犬田卯著『農民文学史』(農山漁村文化協会、一九七七・一〇)において記している他、内藤由直『第五階級の文学——犬田卯の農民文学／プロレタリア文学論』(『立命館文学』二〇〇九・一二)が詳細に経緯とその本質について論じている。
- (12) 『農民文学の研究』は、第一章「農民文学に就いて」のみ加藤武雄が執筆、第二章「土の芸術の意義と其の社会的使」から第一章「土の文芸研究手引」までを犬田卯が執筆している。
- (13) 季吉は「『調べた』芸術」(『文芸戦線』一九二五・七)において既に、当事者性からの離脱を重視する姿勢を示していた。曰く、これまでの日本の小説は「作者の生活のうちに、意識的に乃至はその大部分無意識に得られたところの、印象のつゞり合せ」(3頁)であり、そうした「無意力的な無尋求的な」(同前)態度こそが「小説がこんにちひよく技巧的になつたり(略)俗情的になつたりした」(同前)原因である。その状況を脱するためには、「鉱山経営、鉱山労働、組合運動、鉱山町、鉱山衛生等、等についての、氷のやうな調査」(同前)に立脚したアプトン・シンクレヤー著／堺利彦翻訳『石炭王』のよ様な「調べた」芸術(同前)が求められるという。この時点では、農民文学については「これと、これもこの頃問題となつてゐる『農民芸術』とを関連させて考へて見度いのであるが、それは他日にゆづる」(4頁)と述べるにとどまっているが、「自然生長と

目的意識」と同様の問題意識が既に示されていることが分かる。

(14) 船戸修一「農民文学とその社会構想——農民文学者・犬田卯の農本思想」(『村落社会研究』二〇〇四・三)。船戸は、「労働者も農民を搾取する」という命題に説得力を与えるための「資本主義機構に対する独自の理論分析」(39頁)を卯は十分に用意できなかったとしつつ、だが同時に、「日々の農作業や農村生活の中から紡ぎ出されてくる身体的な生活感覚や生活実感から「土の芸術」を形成し、それを基軸として現下の社会を批判していく姿勢にこそ犬田の思想的意義を認めるべきではないだろうか」(同前)と指摘している。

(15) 蔭木達也「農民自治」思想の構想と展開——昭和初期の雑誌『農民自治』『農民』を中心に」(『村落社会研究ジャーナル』二〇二〇・四)

(16) 勝本清一郎「平林たい子氏の「夜風」を推す」(『前衛の文学』新潮社、一九三〇・一)

(17) 青野季吉「農民文学論」(『青野季吉選集1 革命と文学』社会思想研究会出版部、一九五三・五)

(18) 注(16)に同じ。

(19) 中山和子「笑う女、女の号泣——平林たい子初期作品」(岩淵宏子・北田幸恵・高良留美子『フェミニズム批評への招待——近代女性文学を読む』学藝書林、一九九五・五)

(20) 青野季吉「自然生長と目的意識」

(21) 注(5)に同じ。

(22) 注(19)に同じ。

(23) 注(16)に同じ。

(24) 注(16)に同じ。

(くらた・ようこ)／本学准教授